平成28年度第１回栃木県総合教育会議

議事録

日　時　平成 28 年５月 25 日（水曜日）
　　午後３時から午後４時 20 分まで

会　場　栃木県公館中会議室

出席者	教 育 長	宇　田　貞　夫
	教育委員（教育長職務代行者）	吉　澤　慎太郎
	教育委員	伏　木　由佳子
	教育委員	工　藤　敬　子
	教育委員	陣　内　雄　次
	教育委員	岡　　直　樹
	知　　事	福　田　富　一

１．開会

○司会　それでは定刻となりましたので、これより平成28年度第１回栃木県総合教育会議を開会いたします。

なお、当会議は県総合教育会議設置要綱第５条に基づき公開で行うことになっておりますので、ご了承願います。

２．挨拶

○司会　初めに、福田富一知事よりご挨拶いたします。

○福田知事　皆さんこんにちは。

お忙しい中、教育委員会の皆様方には第１回の栃木県総合教育会議にご出席をいただきまして、心から御礼を申し上げます。

また、皆様方におかれましては、本県の教育施策の推進に大変なご尽力をいただいておりますことに、改めて御礼と感謝を申し上げます。

ご案内のとおり、県では本年４月から「とちぎ元気発信プラン」をスタートさせました。「人も地域も真に輝く　魅力あふれる元気な“とちぎ”」の実現に向けまして、全ての活動の原動力となる「次代を拓く人づくり戦略」を第一の柱としまして、５つの重点戦略の下、とちぎを元気にするプロジェクトを部局横断的に展開しているところでございます。

さて、この会議につきましては、昨年度の３回にわたる会議において貴重なご意見を頂戴いたしまして、本県の教育、文化等の振興に関する総合的な方針を定めた「栃木県教育大綱」をおかげさまで策定することができました。本日の会議では、この大綱におきまして施策の方向１に設定されている「確かな学力の育成と教育環境の整備」に掲げられております「学力の向上と生活習慣の定着について」をテーマとしております。皆様方から積極的なご意見をいただきますようお願い申し上げまして、開会に当たっての挨拶といたします。

３．議事

（１）学力の向上と生活習慣の定着について

○司会　それでは、これより議事に入ります。

ここからの議事の進行は、本会議の招集者でございます福田知事にお願いいたします。

○福田知事　それでは早速、議事を進めてまいります。

テーマは今申し上げたとおり「学力の向上と生活習慣の定着について」でございます。大綱の基本目標の１、「知・徳・体の調和のとれた発達を促すことによって生涯にわたって学び続ける力を育みます」の実現に向けて定めました施策の方向１「確かな学力の育成と教育環境の整備」にも掲げましたとおり、非常に重要なテーマだと考えております。

このテーマに関する資料を教育委員会事務局で作成いたしましたので、まず説明を聞いていきたいと思います。では説明を願います。

○事務局　それでは、学力の向上と生活習慣の定着についてご説明いたします。

資料１をごらんください。学力向上につきましては、１にありますとおり「栃木県教育大綱」に示されております。２の県教育委員会における主な取り組みとして、小中学校においては「とちぎっ子学力アッププロジェクト」を平成26年度から推進しております。今年で３回目となります「とちぎっ子学習状況調査」の実施や、学校の組織的な取り組みを支援するための学力向上アドバイザーの派遣事業等がございます。特に学力向上アドバイザー派遣事業につきましては、今年で公立小中学校全てに派遣することになります。

ここで、本県の学力の状況についてでございますが、下の表をごらんください。これは平成27年度の全国学力学習状況調査の結果を示しております。教科に関する調査結果について、中学校理科以外の９教科で全国平均を下回っております。特に小学校国語Ｂ、小学校算数Ｂについては全国から２ポイント以上低く、県教育委員会といたしましては、これは大きな課題と受けとめております。

２ページをごらんください。高等学校におきましては、アクティブラーニングを取り入れた授業実践を支援する事業や、生徒が自ら課題を発見し解決を図る思考力や判断力、社会参画力等の実践力の育成を目指します「高校生学力向上総合支援事業」を実施しております。

次に、３の児童生徒の生活習慣における現状と課題についてでございますが、ここでは全国学力学習状況調査で上位にあります秋田県と本県との比較を中心に、質問紙調査の結果をまとめてございます。ここの欄とあわせまして、資料２をごらんいただきながら説明をさせていただきます。

資料２の１ページをごらんください。家庭学習の時間について、本編では「全くしない」「30分未満」これを合わせまして、小学校６年生で8.1％、中学校３年生で11.1％です。秋田県を見ますと、多くの児童生徒が家庭で学習する習慣が身についていることがわかります。また、下段は学習塾についてですが、本県と比較して秋田県では塾で学習する児童生徒の割合が低いことがわかります。

２ページをごらんください。宿題についてですが、これは秋田県とほとんど差はなく、本県でも宿題によく取り組んでいることがわかります。一方、自分で計画を立てた学習につきましては、秋田県と比較いたしますと本県の割合は低いことがわかります。

３ページをごらんください。テレビやビデオ、ＤＶＤの視聴時間について、本県では視聴時間が３時間を超える児童生徒の割合は、小学校６年生で36.2％、中学校３年生で30.2％です。秋田県と比較いたしますと、長時間視聴している児童生徒の割合が高いことがわかります。携帯電話やスマートフォンの所持、使用時間につきましては、小学校６年生では大きな差はありませんが、中学校３年生で３時間以上使用している生徒の割合は、本県は13.6％と高くなっております。一方、秋田県は9.0％でございます。

４ページをごらんください。読書についてでございますが、本県の30分以上の割合ですが、小学校６年生で39.2％、中学校３年生で33.4％でございまして、秋田県と比較して小学校６年生については高くなっております。

最後のページ、５ページでございます。朝食や就寝時刻につきましては、本県と秋

田県はほぼ同様の経過が見られるところでございます。

県教育委員会といたしましてはこれらの結果を踏まえ、市町教育委員会と連携を密に図りながら、今後とも児童生徒一人一人の学力の向上と生活習慣の定着に向けて取り組んでまいります。

説明は以上でございます。

○福田知事　ただいまの説明を聞いて、全国学力テストの成績上位の秋田県と栃木県を比較いたしますと、幾つかの傾向が見られるようでございます。この中から幾つかの点についてご意見をいただきたいと思います。

資料から読み取れる点についてですけれども、まず秋田県では家で学校の宿題をしている割合や自分で計画を立てて学習している割合が高い傾向があるようです。また生活習慣の面では、秋田県は携帯電話やスマートフォンの使用時間が少ない。一方、読書時間は小学校では本県のほうが秋田県よりも多い。考え方として、小さいころからの取り組みが基本で、家庭での計画的な学習につきましては小学校の低学年から、あるいは中学生から、高校生からなどに分けられると思います。学習や生活習慣、これらにつきましてぜひ委員の皆様方のご意見をいただきたいと思います。

まず、教育委員会としての意見から聞いてみますか。感想はありませんか。宇田教育長。

○宇田教育長　このデータを見ながら、栃木県と秋田県を比較することによって本県の課題というか、いい点というか、そういうものを出そうというふうな資料として読み取るわけですけれども、人口規模が違う、生徒数が違う、学校数が違う、それから塾の数も多分違うだろうという中で、ひょっとすると秋田県などはやはり家庭での学習を非常に重要視してこれまで来た、歴史みたいなものが背景にあるのかなというようなことを考えながらデータを見ておりました。

私の持論でもあるんですけれども、特にこの年になってつくづく思うのは、やっぱり家庭教育、親の背中をきちんとするということがその後の学校生活では非常に大きい役割を果たすのかと思っています。学力にしても生活習慣にしても、家庭の部分で基礎づくりをすれば、例えば家庭というと今はなかなか、我々が教員のときに教えた生徒たちが親になっているわけですので、ある意味で責任を感じるではないですけれども、そういう思いもちょっとあるところですが、今親を見ていると、例えば子供がいて家庭で話をするときの、特に夫婦同士で話すときの言葉遣いであるとか思いやりであるとか、そういうものをやっぱり子供は非常に敏感に感じ取る感性を持っていますので、そういうものがやっぱりなおざりにされているのかなと。ひょっとしたら夫婦同士なのに乱暴な言葉で話をしたり、きちんと相手の目を見ないで話をしたり、あっちを向いて話したり、そういうものを感じ取っているのかなという思いがあるので、自分の反省も含めてありますので、そういうところをきちんと我々の世代が言っていかなきゃいけないのかなという思いが１点します。

まず最初ということで、そんな点を申し上げました。

○福田知事　口火を切ってもらいましたが、計画的な学習については小学校の低学年から決められた時間に学習に取り組ませるとか、学校で学習した内容について話させるとか、あるいは小学校の中学年では一つのことに継続して取り組む、あるいは少し難し

いことにも挑戦させ、そして達成感の喜びといったものの体験をさせるとか、身近なニュースや出来事から課題や問題意識を持たせるとか、小学校の高学年にあっては時間、内容などの具体的な目当てを自ら立てて実行できるように見守るなどが考えられます。

生活習慣においては、小学校低学年では「早寝早起き朝ごはん」なんていうのがあるかもしれないですね。当然あしたの準備をしておく、読書をする。中学年ですとテレビ、ゲームの時間を自分で決めさせるとか、高学年あるいは中学生に至っては、携帯電話、スマホなどについては家族で話し合ってルールを決める。こういうことも細かい話になってしまうんですけれどもやっていく、家庭の中で取り組んで子供たち一人一人に実行してもらうということが必要かなと。しかし、その大前提としては今教育長が言ったように親の役割、家庭環境ということになってしまうんだと思います。それらにつきまして、皆さん方のご意見も頂戴したいと思います。工藤委員。

○工藤委員　今の資料としては、秋田の資料との比較という形で出ておりますけれども、秋田は混合的にいわゆるまちおこしの一環として子供の教育というものを捉えているわけです。やはり物のないというところで、何を県の魅力としていくのかというときに、教育を真ん中に据えて取り組んできたというのが、やはり他県と比べて全く違うところではないかと捉えております。そういう意味では、秋田には日本の中で非常に人気の高いＡＩＵの大学が設置されていますし、世界からここにあこがれて来るような大学が設置されていたり、その中に非常に魅力的な図書館があったりということで、アカデミックなまちづくりというのが、子供たちが学びにあこがれる、まずは環境という土壌が非常にあるのではないかと感じております。なので、子供たちが自主的に学ぶのかというと、なかなかそこまで意識の高い子供たちというのはいないわけで、周りの環境に流されていくものかと思いますので、まち全体としてそういうアカデミックな醸成がしっかりとでき上がっているというのがやはり大きな特徴かと思います。

また、秋田の授業をごらんになった先生方が一様におっしゃるのは、やはり先生方が子供たちがやる気になるような引き出し方が非常にうまいと。どうしても学力の向上というと子供たちに負荷をかけて、もっと宿題を出してもっと勉強を頑張りなさいという負荷をかけがちなんですけれども、そうではなくて自ら学びたくなる、もっとやっていきたくなるというようなモチベーションを高めるスキルというものが非常に先生方の中にもおありでいらっしゃるというのが感じ取れるんです。親の力を強めていくというのは非常に難しいと思っていて、親世代のほうが多分スマホとかテレビとか、もうほとんど際限なく使っている環境の中で、子供たちだけに制限をかけるというのは非常に難しいと思いますので、学校でなぜ勉強するのか、どのように計画を立てて学びを進めていったらいいのかということを、宿題を例えば出す、プラスそれをどの時間でどのように学んでいくのかという時間的な部分も学校側できちんと指導しながら、ここときこのテレビが見たいんだったら、じゃあ宿題はどこの時間でやろうかということを一人一人に、子供も納得して進められるような計画性というものを一緒に考えていくということを細かにやっていかないと、時間を決めてやりなさい、スマートフォンは何時間までというところが難しいのかなと思いますので、いろいろな要因が絡み合っているかとは思いますけれども、そういったところの親の力をつける

というか、親の意識を高めるというのは、やっていらっしゃる方はやっていらっしゃって、そうはなかなかいかないところがあると思いますので、学校側でそのあたりもきちんとフォローしていくということが今後の大きな課題になっていくのではないかと捉えております。

今回は今ある学力という物差しでのお話ですが、今後、学力という物差しも2020年の学習指導要領が大きく変わっていくので、その中でのお話はまた後ほどさせていただければと思います。以上です。

○福田知事　今の話で、まちおこしに教育を基本にしているというのはいつからやっているんですか。明治時代からやっているんですか。

○工藤委員　いえいえ、本当に最近のお話です。この大学ができるころですので、すみません、私もちょっと、そんなに昔ではないです。

○福田知事　ありがとうございます。

先生の資質、教え方の技術という言葉を使うのがいいかどうかわかりませんが、要は能力ですね。そういう話も出ましたので、また後で議論したいと思います。

岡委員。

○岡委員　この資料を見させていただいて、知事も食育が大切だということをおっしゃっておりますが、要は学校で何があったとか、こういう勉強をしたよとか、というのを家族で晩御飯を食べながらとか、親子関係でそういう情報を入れることはすごく重要なんじゃないのかなと思うんです。ただ、なかなか今お父さんが忙しい、お母さんが忙しいで、家族が一緒に食事をしてそこでいろんな話をしているというのも少なくなっているのかなという気がしています。ですからそのことを親が家庭の中でやること。家庭が大事とさっき宇田教育長もおっしゃっていましたけれども、僕も家庭が大事だというふうに思っています。

それと工藤委員からも出ましたけれども、教師と親とが入ってこういうスケジュールでやろうというのを本人も交えて確認したほうがいいです。少し大変な部分があったりしても、先ほど知事もおっしゃっておりましたが、達成感というものを、ああこんなに頑張ってこれができるんだということをわからせる。ただし、その場合に家庭が大事、親が大事と言っておりますが、親が手を出し過ぎない。余り手を出し過ぎちゃってというのが親。だから見守るということが大事なんだろうなというふうに思います。

それと気になったのが早寝早起き。早寝をしなければ早起きはできないだろうと思います。じゃあ早寝となったときにこの種の５ページの寝る時間って、小学生の同じ時間で見ますと43.7％、中学生は33.4％。これ多分、中学生だと塾があったりとかして遅く帰ってくる子もいますので、こんなに早く寝られるのかなと見ましたけれども。もうちょっと毎日規則正しくするには、やっぱり同じ時間に寝るということが、これもまた家庭の大切さというふうになるわけですが、それも重要だと思うんです。

それと早寝です。どの家庭でも子供部屋がありますね。もう今では兄弟みんな一つ一つ持っている。部屋に行っちゃうと、そこにもしかしたらテレビもあってインターネットでつなげる環境があったり、いつまでたっても寝ない。まして親がそこを見に行かないから、それを親が把握できていない。ケータイ、スマホなんかを部屋に持っ

ていっちゃえばいつまでたってもやっているということが可能性としてあるわけです。ですからご家族でやっぱりルールを決めて。私の娘と私は約束をして、部屋には絶対持っていかないという約束をしている。お父さんも持っていかない、お母さんも持っていかない、リビングに３台ケータイを並べておくという決まりをつくってそれでやっている。そのようなことを家族で話し合ってやることって重要なんだろうなと思います。

それと、この資料に宿題によく取り組んでいると先ほど説明がありましたけれども、小学校で87.2％、中学校にいくと66.9％。学校で出る宿題というものの６割、７割の66％しかやらないのかと逆に僕は思ったわけです。秋田のほうは75％と報じてはありますけれども、小学校ではそんなに違いはないということなのですが、中学校に入って宿題を軽んじるわけはないと思いますが、何でかと考えたときに、部活ってどうなっているんだろうと。よくＰＴＡのお母さんと話をする機会がありますと、いや部活で疲れて帰ってきて、夜、家に帰ってごはん食べてすぐ寝ちゃうのよというような話を聞くんです。だから部活と宿題の関係なんていうのはあるのかなということを思いながらこの資料を見させていただきました。

一応、資料の感想ということでお話をさせていただきました。以上です。

○福田知事　ありがとうございます。

親の考え方と子供とのコミュニケーションというところにやっぱり起因するのかなというように思いましたけれども、陣内委員お願いします。

○陣内委員　私は、まず２ページの自分で計画を立てて学習しているというところが気になりました。秋田県と他地域を比べますと、秋田県のほうが自主的に計画を立てて学習している子どもたちの割合が高いということですが、家族構成というか三世代同居が多いというようなことが要因かもしれません。祖父母と同居している、そういうことも影響しているのかなと想像しながら、この数字は見ていました。

もちろん学校での先生方の指導もあるとは思うのですが、どうして秋田の子どもたちのほうが自立的に学習する習慣がついているのかなというところは、やっぱりしっかりと何かしら分析する必要があるのではないだろうかと、これを見て思った次第です。

次に朝食についてなのですが、調査結果によると多くの子たちが朝食をちゃんと食べていますということなのですが、ただ、じゃあ朝食って誰と食べているのとか、どういう状況で朝食しているのだろうとか、一人で食べているのかとか、そういう状況も勘案する必要があると思います。食事というのは家族がコミュニケーションをとりながらというのが理想ではないでしょうか。朝食のあり方については、数だけではなく、質的な分析も必要ではないかと感じました。それが分かったからといってどうしようということはこちらではできないわけですが、親の学びというところではそういうところが少しデータとして見るといいかなと思います。

それと、知事の最初のご指摘にもありましたが、テレビやビデオの視聴時間、それとスマートフォンの利用時間などです。３ページにあるのですが、テレビの視聴時間、それとスマートフォンの使用時間を単純に合計してパーセンテージで見ると、栃木県の小学校６年生は３～４時間以上が41％、中学校３年生では３～４時間以上が43％、

これが毎日なわけです。これだけの時間を毎日費やし、じゃあいつ勉強しているんだろうということをこの数字を見て思ったわけです。秋田県もそんなに低いわけではなくて、小学校６年生で35％、中学校で30％。でもポイントで見るとやはり中学校はかなり差があります。栃木は約43％ぐらいで、秋田は30％ですので10ポイント以上の開きがあります。

ここについてもやはり学校で何かしら取り組む必要があるかと思いますし、保護者が以上のことについて家庭でどのようにしているのかということも気になるところではあります。いろんな研究で学力の向上と生活習慣の定着というのは相関関係があるということがわかっていますので、こういうところは少し見直していく必要がある基本的なデータではないのかなということを、これを見て感じたところがあります。

とりあえず以上です。

○福田知事　ありがとうございます。

朝食をとるかとらないかというのも大事だけれども、誰と食べるかという調査もアンケートをやるときには必要かなと、話を今お聞きして思いました。

吉澤委員。

○吉澤委員　似たようなことになりますが、秋田は毎年上位にいますし、栃木はまだまだ下のほうにいるわけであります。このような調査結果を見ると、実際、塾の数は秋田は相当少ないそうですから、家の中できちんと勉強をされている。しかも計画的に自分でスケジュールをつくって勉強しているというあたりが多分大きいのではないかと思います。

さっき工藤委員からもお話がありましたけれども、学校での教え方の問題というのはどうもいろいろありそうです。栃木県内に優れた先生方が随分おられるわけですから、小中学校のリーダー的な先生たちを秋田に限らず福井であるとか先進的な県に派遣して、実際の教育現場から学びとってきて、それが教育現場に生かされるというようなこともあっていいのかなと思います。

それから、やっぱり学校と家庭の連携が非常に重要であり、学校の授業だけではなかなかうまくいかない部分を家庭できちんと学習しなければいけないと思います。そしてそれを裏づけるのがきちんとした生活習慣であり、各生徒がそういう動きができるように学校・家庭が見守る、手伝うということができると、次第に栃木県の学力の成績も上がっていくものと思われます。

○福田知事　ありがとうございます。

先生をどういうふうにレベルアップをさせるかということについては、後でまた教育長に伺います。

伏木委員。

○伏木委員　大体、皆さんが指摘されたことと同じような感想を持ちました。私が秋田県に感じるのは、塾が少ないということもあるのかもしれませんけれども、先生の役割と家庭の協力というものがきちんとなされているのではないかというふうに感じました。先生への信頼感とか、学校を信じて期待するという力が大きいのかと思います。また家庭が学校を支えるということがうまく回っていて、児童生徒が安心して学んでいるのではないかと思います。

この資料を見させていただくと、どの人も時間は24時間なので、それはもう平等に決まっているので、それをどのように使うかということを子供にだけ任せていては、漠然とした時間の使い方ではやはり学ぶ時間というものが後回しになってしまうかと思いますので、これは学校での働きかけもそうですし、家族でも何を選択するのか、この24時間の中で大事なものって何だろうというようなことを常々考えたり、話し合ったり、見直したりということはぜひしていただきたいと思います。

それと勉強ばかりじゃなくて、本当にスマホやテレビばかりに時間を割くのではなくて、保護者も忙しいとは思いますけれども、同じ共通の話題で話し合ったり、価値観を家族で共有したり、また学校でもそうですけれども、こういう時間の使い方が大事だねということを、ぜひ、取り組めるところはそこかなと感じました。以上です。

○福田知事　ありがとうございます。

それでは、まず先生の能力、教育力、指導力ということについて、教育長、教育委員会でどう捉えているのか。

それから、自分も今、伏木委員の話を聞いていて思いましたけれども、以前は、先生と家庭、あるいは学校と家庭の役割って分担がちゃんとできていたんです。じゃあ何でそれが今はできなくなっちゃったのという、その２つを教育委員会としてどう捉えているのかお願いします。

○宇田教育長　まず教員の指導力というお話ですけれども、採用試験にさかのぼると栃木県が教員に求める教師像として示しているものが、自分自身が自信と誇りを持って子供たちと向き合えるということ。その下に３つあって、人間性豊かで信頼される。それから、幅広い視野と確かな指導力を持った教師。教育的愛情と使命感を持った教師という３つを上げているところですけれども、ある程度の知識と指導力と技術とを持って教員になってくるんだというふうには思っていますけれども、そういう中で先ほど工藤委員がおっしゃられたように、子供をうまく乗せるというのではないですけれども、そういう構造、技量を高めていくためには、やっぱり自分自身が勉強しなきゃいけませんし、そういう研修の機会に積極的に参加したり、今はやっているのは、はやっているというとおかしいですけれども、学習の仕方のものでよくアクティブラーニングというような言い方をされていますけれども、生徒を動かす。今まで教員が与えていたものを、それに対して今度は生徒をそこにうまく乗せて１時間の授業を構成するというようなことがありますけれども、それも含めて子供たちをうまくやる気にさせる指導力というものが求められるんだろうと思います。

そういう意味では、教員の研究の機会としては特に高校、中学校、小学校、全部ありますけれども、高教研、例えば高等学校教育研究会の中に各教科の部会があって、研究授業を見たり、それから議論をしたり、そういうことをやっている。やりながら授業力というか、そういうものをつけているはずなんですけれども、専門性を高めるというのはもちろん一番大事なことだと思いますが、子供というところはやっぱり実践の中で意識をして勉強し、やっていくことかなというふうに思います。何かちょっと抽象的になっちゃいますけれども。

ウィリアム・アーサー・ワードだったと思いますけれども、「凡庸な教師はただしゃべる。ちょっとすぐれた教師は自らやってみせる。一番すぐれた教師は子供の心に

火をつける」というようなことを言いますけれども、実際に私自身が理想とするところは、やっぱり子供たちに知ることの楽しみ、それから考えるということの意味、考え抜くことのつらさ、深い理解に達成したときの感激とか、そういう体験をさせる舞台を授業の中につくっていってもらえればと思いますので、これからも教員にはそういう思いを訴えていきたいと思っております。

それから、学校の役割と家庭の役割がきちんと分かれていたはずなのに、何でできなくなっちゃったのかなというところですが、学校は忙しい、親も忙しい。そういう中でよく言われていることですけれども、核家族化の進展ですとか、少子化もあるかもしれませんけれども、特にやっぱり社会の構造が変化してきてしまっている。価値観も多様化してしまっているという中で、ひょっとすると家庭がやるべきことで家庭ができなくなっているので学校が手を出す、あるいは行政が手を出す中で、昔みたいに学校の先生が言うんだから間違っていないでしょうとか、学校で怒られてうちに帰って言うと逆にまた親に怒られたとか、そういう学校に対する信頼も薄れてきているという中で、家庭の役割というものが曖昧になってきちゃっているのかなという思いです。しっかりしたデータの上でお話ししているわけではないんですけれども、私自身の考えで申しわけありません。

○福田知事　ありがとうございます。

それでは、今各委員の皆さん方から学力向上、生活習慣もこのあたりには含まれているんですけれども、ご意見を全体的にいただきましたが、改めて今の議論、あるいは教育長の考え方、教育委員会としての考え方もお聞きしたわけですが、子供たちの学力向上、あるいはよりよい生活習慣を定着させる、そのためにどうしていったらいいのか。誰が何をどういうふうにしていったらいいのか、そのことについて改めてご意見をいただきたいと思います。

今度は吉澤委員から、最後に教育長にまとめてもらうということにしたいと思いますので、吉澤委員からお願いします。

○吉澤委員　まず学力向上ということは、小学校、中学校の生徒が学んだテストの結果になるわけですけれども、「とちぎっ子学力アッププロジェクト」で成果を出せるよう取り組んでいるわけでありますから、さっき教育長のお話にもありましたけれども、やっぱり現場の先生方の力が十分に発揮されるようなことが重要だろうと思います。我々メーカーですといわゆる現場力を向上させることが企業力向上に繋がっています。

学力向上アドバイザーということで、現状よりも学力を上げなきゃいけない現場の先生方が、先進地からいろいろなものを吸収してきたり、県内で横断的な勉強会をしながら、お互いに学び、いい点が引き出せるような取り組みが求められます。そして、小学校低学年の時に勉強の仕方をしっかりと教えられるといいですね。学び方の基礎がきちんとできれば、後の積み上げはできやすくなると思います。授業についていけない子を無くしたいですね。

学力向上の基本は学校であって、授業の中でいかに生徒が学び切れるか、吸収し切れるかだと思います。

さっき工藤委員からもありましたけれども、家庭における宿題の仕方とか時間の組み立てなどの学習習慣が身につくといいと思います。

○福田知事　ありがとうございます。工藤委員。

○工藤委員　今、学力の向上についてというテーマなんですけれども、これから取り組むと何年かかかるということで、実は2020年にこの学習指導要領が大きく変わると言われております。私も都内の勉強会などには積極的に参加させていただいているんですが、学力の物差しが今までは「できる」というところが物差しになっていたものが、2020年からは「できる」と「わかる」と「わかり合う」という３つが学力の物差しになると言われております。

私はこれをそれぞれに分けて向上させていく必要はないと思っていて、ここからが少しシステムの話をさせていただきますが、できるということはまずは基礎知識の部分なんです。今、学校ではこの基礎知識の部分を中心に先生方は教えているわけなんですけれども、これからは基礎知識の部分はｅラーニングが導入されていくと思うんです。それは子どもたちへの教育の質の保証と先生方の業務の削減の２つが解決できると言われていて、45分の授業で理解できる子は勉強もできる子、だけど１回の授業でわからなかった子は勉強のできない子という線引きができてしまうわけです。私も今、都内の大学に通信で通っていて、実はｅラーニングで基礎的な講義は聞いてくるということなんです。やっぱりわからないので何度もそこを繰り返し聞いたり、ノートをとったりということができる。それでしっかりと基礎学力がつくんです。

私も先日、ビッグサイトで行われた教育会議ソリューションに参加させていただいたんですが、今は本当にすばらしいシステムができていて、これらはやっぱりそれぞれが学習をしてくる、あるいは子どもたちはそういうものが大好きですので、楽しみながら学べるということがあります。今、学校は場の共有だけで、実は先生と子どもという１対１の学びでしかないんです。この後は、これからというのは自分たちが基礎知識を得た上で、わからない子たちへのフォローであったり、あるいは学んだことに関しての議論です。例えば文章に関しての感想文を書くというものの答えが一つだったものが、それがほかの人はどういうふうに考えたの、どんなふうに感じたのということをみんなが話し合ったりという、まさにアクティブラーニングが授業の中心になっていくと言われております。

この学習を既に佐賀県の武雄市では、小中学校の反転授業と言われているんですが、予習をしっかりと子供たちがｅラーニングで学んで、それを持ち寄って新たな学びを展開するということを既に始めているんです。ですからやはり本来、先生方が力を入れたかったところというのは、やっぱり細やかなフォローであったり、みんなが集まってしかできない授業というものを展開していくということが先生方でもやっていきたいものだと思っていますし、それからやはり子供たちにはこれからの本当の力になってくると思うんです。ここまで日本はものづくりニッポンということで、例えば90度に曲げるものをつくるというか、その精度が高くできたわけです。でもそれは技術の継承によって、精度の高いものをつくるということは人件費の安い海外がやることになるんです。だけれども例えばそれを60度に曲げてみた、あるいは120度に曲げてみた、そうしたらこんなものができ上がったという、新たなアイデアの創出がこれからの人材に求められるということで、そういった新たな発想が生まれてくる場というのが、やはりワークショップでありアクティブラーニングだったわけです。私は今、都

内の大学でワークショップデザイナーのスキルを学んでいるんですが、本当にこれを教育現場の先生方が活用できたらどんなに生きた授業になるのではないかということを考えています。

高校でも2020年からはプロジェクト学習が中心になります。これはどういうことかというと、教科ごとが縦割りになるものではなくて、例えばタックスヘイブンという話題があったとしたら、そこから言語であったり、経済であったり、歴史であったりということを学ぶというのを３週間ぐらいのスパンで学んでいく。こういったプロジェクト学習がもう2020年からはそういった学習が中心になると言われているんです。ですから先を見越した学びを先進的にやっていくということも、学力の向上の目標自体をどこに据えるのかということで取り組みも変わっていくと思っております。

そういった中で、先生方の負担がふえるのではないかという懸念もあるかもしれませんが、今そういった先生方がそれぞれにつくったものをアップして、それを教育委員会の中で共有して、同じものを何度もつくるのではなくて、優秀な先生方のそういった知識の継承ということもできるようなシステムも既にあるんです。ですからそういったところを先駆けて2020年の新しい学びや、新しい人材への転換ということも見据えた学力の向上ということに、私は取り組んでいっていいのではないのかなというふうに思っております。

少し論点がずれたように感じたかもしれませんが、私自身は先を見たそういった学びが展開できたらどんなに子どもたちが授業中、生き生きとできるようになるのではないかなというふうに感じております。以上です。

○福田知事　ありがとうございます。岡委員。

○岡委員　学力向上の課題や生活習慣の定着というのは必要であろうと思います。ただ、学校で保護者会の時などを通して生活習慣の定着は重要ですよということを発信しようとしても、結構そういう場面には一番伝えなくちゃならない親御さんたちが出てこなかったりするんです。ちゃんとできている親はいっぱい出てくるのだけれども、できていない親御さんのほうがそういう場面に出てきてくれない。ですから学校を通してその親、家庭に向けて発信をしていくというのは限界があるんだろうなというふうに思います。

ですからどうしても学校サイドにそういう部分まで求めるようになってしまう。しかしながらやはり基本的には家庭でやることなわけです。先生にはそういうところじゃないところにもっと力を使ってもらいたい。ただ、それを言っていても解決にはならないので、やっぱり指導力の向上というものが必要になってくるわけであります。だけど求め過ぎてはいけない。先生が忙しくなり潰すことになるのかなと思うんです。大綱の施策の方向１の中で書かれていますけれども、「教員の養成・採用・研修の一体的な取組の推進」とあります。養成・採用・研修という中で、それを念頭に置いて、どこかの部分でトレーニングしていって、いきなり言われて負荷がかからないような、最初からそういう形だということをその当初からつくっていく、その中で伝えていくということも必要なのかと思います。

それと、先ほどの保護者によく伝える方策ということですけれども、教育委員会の考えを学校に言って、学校から親に伝えるというのがなかなかできないとするならば、

もっと例えば県Ｐ連であるとか、県の高Ｐ連であるとか、そういうところに直接働きかけをする、そういうところと連携をとるということも必要なのではと思っています。学校を通して、学校のＰＴＡから家庭へではなくて、そういう団体があるのだから、直接そういうところに働きかけをするということも一つの手なんじゃないのかなというふうに思っています。

それと、私たちは年に何回も本県の中を回って、各市町の教育委員会の皆さんとの意見交換ということもします。その中で各市町のすばらしい取り組みっていっぱいあるんです。ですから県の教育委員会が考えたことを各市町のほうへ送っていってそこで連携をとるだけではなくて、各市町のすばらしい取り組みというものを横に流していく。それを共有する。県の中でもやっぱり成績の上下というのはあるようです。それを全体的にボトムアップしていくためには、やっぱりいい事例というものを横に回していって、いいなと思ったことをすぐ実行できるように。県の考えることを落としていくだけではなくて、各市町がやっていることをつないでいってあげるということも、もしかしたら教育委員会の事務局でできることなのかなというふうに考えています。以上です。

○福田知事　陣内委員。

○陣内委員　今日の資料２、平成27年度全国学力・学習状況調査については、もう少し丁寧に分析する必要があるのかなと思います。例えばここ近年、学力がすごく伸びているところはどこなのか。もちろん秋田は継続してそうなのですが、ドラスチックに伸びているところがあれば、何でそうなったのかというあたりを学力の向上と生活習慣というところからきちんと分析していくことも重要ではと感じます。

それと学力向上ということを考えるとき、学校をどういうふうにエンパワーメントしていくのかということが重要になります。それはひとえに先生たちがどういうふうにお仕事をできるのかということだと思うのです。そうすると言い尽くされたことではあるのですが、先生方が忙し過ぎるとか、なかなか研修にもしっかり取り組めないとか、そういう基本的なところが改善できていないような状況がありますので、そこをどういうふうに改善していくのかというあたりをしっかりと検討していって実践していく必要があるかと思います。

私の研究室からも、卒業して栃木県内の学校の先生になる学生たちがいるのですが、現状を聞いているとなかなか大変な状況なようです。二十歳そこそこの卒業生たちががんばって先生になって、希望を持ってずっと先生を継続できるというふうにしていく必要があるのではと常々感じているところがあります。

それと学力観というところをどういうふうに捉えるのかということがあると思うのです。もちろん文部科学省が出す指針の学力観というのがあるわけなのですが、それだけではなくて栃木県の教育委員会として考える学力観というものをしっかりと捉えて、そのあり方ってどうなのかということを探求する。近年はアクティブラーニングということが言われています。これもやはり文部科学省からのトップダウンで取り組んでいる側面が強いと思うのですが、大学でもアクティブラーニングということを盛んにやっています。そのときに陥りやすい問題が、技術論に走ってしまうということです。アクティブラーニング的なものをやると格好いいみたいな、学生たちも喜んで

やっているという雰囲気ができてしまって、何のためにアクティブラーニングという手法を用いて学びの場をつくっているのかというところを、深いところまでしっかり理解した上で取り組むということができていない。要するに一過性のブームで終わってしまうかもしれないということを心配しています。したがいまして、しっかりと先生方の研修で取り組んでいくことが重要だろうと考えています。

一方で、私はどうしても地域の中での学びが相当重要なんじゃないかなというように感じていまして、今日は学校現場での学力観なのですが、地域や家庭の中での学力観もしっかりと捉える必要があるでしょう。大学で教鞭をとって18年になります。研究室に所属する学生たちとは卒論や修論では、寝食をともにするような感じで研究を仕上げていきます。リーダーシップをとれたりとかコミュニケーション能力がすごく高かったりする学生が中にいるのですが、そういう学生たちの成育環境を見ていくと、地域の中ですごくいい体験をしていたりとか、親子の関係がしっかりしています。なので学校現場でないところでの豊かな経験、学びの機会、そういう側面も大切にみていく必要があろうかと考えています。

○福田知事　ありがとうございます。では伏木委員。

○伏木委員　私もいい取り組みを集中して行うには、先生の時間を見直して学びとか授業へ取り組む力をもっと授業に傾注できるような形にしていかないと、ただ新しいものをどんどん、この取り組みがいいからといって入れていくだけではいけないかと思います。学力ってピラミッドのような形で、上へと目指すことがいいことというふうには誰も思っていなくて、もちろん上を目指す人も必要なんですけれども、最終的には自立していくことがあるわけですから、自分で学ぶ意味とか学ぶ気力というものを持って、失敗しても自分なりに学び直す。自分との比較をして過去の何カ月か前の自分より成長しているよねというような自信の持たせ方をしていく必要があるのかと思います。

他者との競争というのは、生きている以上、仕方がないのかもしれないんですけれども、そこではなくて、できなかったことができるようになる喜びとか、そういうものを先生の指導力に期待したいと思います。長く生きている間に失敗をしない人はいないわけですから、失敗をすることで自信を失ったり、自分はだめなんだというふうに投げやりになったりとか、そういうことが学びの阻害になっていって教室の中でお客さん状態になるというのが一番よくないことかと思いますので、ぜひ自分の中で少しずつでもできるようになる、そういう自信を持たせるというような取り組み方を、特に基礎学力が必要な小中学校では必要なのではないかと感じます。以上です。

○福田知事　ありがとうございます。では教育長。

○宇田教育長　知事のほうから、生活習慣をきちんとすることイコール学力向上につながるという意味で、それを定着させるには誰が何をどうするんだというお話があったわけですけれども、委員方のお話を聞いて私の中でちょっと整理をしてみると、絶対、子供を中心に考えているのはよく伝わってまいりますけれども、これは外してはだめなので。私自身は、子供がいて乗っかっている車の両輪は学校と家庭だという捉えをしたいと。昔から言われていることかもしれませんけれども、そういう思いを感じました。学校と家庭は車の両輪であるということです。

実際にその車がきちんと回るために学校がやるべきこと、それから我々教育委員会がやるべきことというのは、今お話が出ていた教員の資質を上げること、それからそれに伴って学習指導要領に示された各教科の学習内容、今度は特別の教科としての道徳が新しく入ってきたりしますけれども、そういう情報をきちんと捉え、その先の学習指導要領の方向を捉え、子供たちに求めていく。先生にお話ししておろしていく。そういう学校の役割、教育環境をとにかく整えるという教育委員会としての役割をきちんと果たしていかなきゃいけないということ。

それから、やはり家庭ではこれはもう呼びかけていくしかないし、それからいつの時代でも来てほしい親がなかなか学校に来てくれない。事情があって忙しくてなかなか来てくれない。そういうアクセスをどういうふうにしようかとか問題もあるわけですけれども、やはり先ほど出ていましたけれども、家庭でやるべきことはきちんと学校として校長がということになるかもしれませんけれども、ちゃんと示していく。ちゃんと子供に目を向けてもらうという取り組みを考えていかなきゃいけないかと思いますし、本当は家庭の中で親がそういう思い、目を向けるんだということを気づいてほしいということはありますけれども、先ほど来出ていたように、あんまり学校が手を出し過ぎても何かやっぱりだめかなという思いもありますので、バランスをとりながらの子供へのかかわりというものを我々は示していかなきゃいけないのかなというふうに思います。

そういう意味で子供をとにかく考えたときに、一番大切なのは子供を孤独にしない。誰もかかわってくれないみたいな思いを持つと、やっぱり横に行っちゃったり、あるいは受け入れてくれる安易なところに行ってしまったりという動きが出てきますので、見ているよというのは先ほどの知事の言葉で「見ているよ」と。その思いをお互いに伝えられるように子供にかかわっていこうという思いをいたしました。具体的な話にはなりませんけれども、以上です。

○福田知事　ありがとうございます。

学力それから生活習慣、あわせて最後に委員の皆さんからご意見をいただきましたけれども、まとめれば現場力が重要だと。わかる授業が必要なんだけれども、教師があまりに多忙で、十分、現場の力が発揮できていないのではないかということがまず一つ。

それから、家庭の力、親の力を高めていく必要もあるんだけれども、残念ながらそこに手が届いていない。学校からＰＴＡを通じてやっていくのがだめならば、教育委員会から高Ｐ連とか市Ｐ連とか県Ｐ連とか、そういうところにアプローチをしたらどうか。

加えて水平展開というんですか、市町のいい取り組みをほかの教育委員会にも勧めていく。こういう話がありました。

教育委員の皆様方と今のテーマについて、教育委員会としてはどういう対応を、何ができるのか、知事部局として何を求めていくのか、これを整理して、自分たちのできることは何なのか、あるいは自分たちの領域を広げるのは何なのかということを整理してもらって意見を上げてもらいたいと思いました。

それから、子供が中心なんですから、子供を中心にして家庭あるいは学校、そして

また県教委の事務局、こういうものの連携をどう強化していくのかということが、今日の意見をまとめればそういうことかなというふうに思いました。

やっぱりいい経験、あるいは体験を小中高等学校で積んできた子供、あるいは家庭環境に恵まれた子供、そういう人たちは大学に行っても、あるいは高校生でもリーダーシップを発揮していい活躍をしている。事実として陣内委員からそういう話がありましたので、そういう子供たちを数多く生み出していくことができれば教育力も当然高まる。学力も高まるでしょうし、生活習慣もしっかりした子供になっていくはずですので、その子供たちにスポットを当てるんですけれども、そういう成功体験みたいなものをどうやって数多く味わってもらうか、そのための仕掛けをどうするかということだと思います。

これらについて、まだ今日の意見交換では明確にすることはできませんでしたが、今後の教育委員会の皆様方との意見交換の中でさらに詰めてもらえればありがたいと思います。そして私たちの自分の役割はこれぞというものを上げてもらえれば、速やかな対応をしていきたいと思います。

よりよい生活習慣を子供たちが身につけるよう、家庭と学校がより連携して取り組んでいくことが重要であると、こんなことがあるわけなんですけれども、また知事部局との連携もこれまた重要だと思います。今後、栃木県の教育におきましては、家庭、学校を支援する効果的な取り組みを進めていく必要があると思いますので、今申し上げましたようなことについて、引き続き議論を深めてもらえればと思います。

それから、今日は取り上げることができませんでしたが、一部、朝ごはんの話の中で誰と食べているのかということが岡委員からご指摘がありましたけれども、食育についても非常に重要だと思いますので、次回のこの会議では食育について議論を進めていきたいと思いますが、よろしいでしょうか。（「はい」の声あり）ありがとうございます。

では、次回はそのテーマで議論を深めていきたいと思います。

課題をたくさん上げてまいりましたけれども、課題解決をこれからどうするかということは引き続き議論を深めてまいりたいと思います。

それから、教育長のお話の中で求められる教師像、もう一度ご紹介ください。

○宇田教育長　はい。

まず、「自信と誇りを持って子供たちと向き合える教師」が大きなもので、その下に具体的に「人間性豊かで信頼される教師」「幅広い視野と確かな指導力を持った教師」「教育的愛情と使命感を持った教師」。本県を受験する学生たちに示しているものです。

○福田知事　信頼される先生なんて当たり前なんだから。そもそも信頼されない先生がいるから時々ニュースになっちゃうんです。ですからそんなのは当たり前のことなので、そこから先に行かなくちゃならないわけです。ついては尊敬なんです、尊敬。尊敬される先生じゃなかったら子供はついていかないと思います。私たちのころは先生を尊敬していたんです、みんな。親もそうなんです。子供もそうなんです。ところが今はどんどん劣化していろんなことが起きるものだから、まずは信頼の回復に努めましょうということで、土俵が一つ内側になっているんです。それじゃあいつになったって

よくならないので、尊敬される教師というのはどうあるべきかという、もう一歩高めていくことが必要だというふうに話を聞いていて思いました。

きのうのサラリーマン川柳の第９位、「ラインより心に響く置き手紙」。そういうところですよね、家族の仲っていうのは。夫婦もそうですし、親子もそうですし。緊急のときにはラインもいいでしょうけれども、やっぱりメモで書いて渡す。あるいは書き置きをしておく。そういうことがやっぱり家族の中で取り組んでいくべき課題かなと思っています。そこに母親や父親の愛情が出てくるんだと思います。手書きの中にですね。

それでは、次回の会議につきましては９月ごろを予定しております。具体的な日程につきましては、後日、事務局から連絡を申し上げます。

４．閉会

○司会　ありがとうございました。

以上をもちまして、平成28年度第１回栃木県総合教育会議を閉会いたします。

ありがとうございました。